

## 戦争体験談

清水 良三（大正 10 年生まれ）

私は昭和 18 年 9 月 15 日赤紙召集にて横須賀第 1 海兵団に入団しました。それから海軍の教育を受けました。10 月に警備隊第 42 に向かって出航する途中トラック島に上陸した。その時、戦艦大和の姿を見て大丈夫、勝つと思った。

11 月に入り次の島に向かう。着いた島は南洋群島ポナペ島。12 月に入り新兵教育が始まりました。19 年の 1 月の半ば、新兵教育が終わり、探照灯に配置になりました。島の兵器は 8 センチ高角砲 2 門、13 ミリ連装機銃 1 門、75 センチ探照灯 1 門、200 ミリ測巨器 1 器、色々物を測る兵器、見張所、指揮所、弾庫、以上の配置あり。

2 月 8 日初空襲、それから毎日 10 時頃になるとやってくる B 17 ボーイング、B 24 コンソリー、B 25 ノースアメリカン、他戦闘機など毎日の空爆で兵舎は壊れ、電源がなく、私は見張所に配置替になりました。本島への通信は手旗信号で行う。本島にはコロニヤという町があった。ある時砲員が外出、砲員不足で私は臨時に手伝いに行った時、耳に脱脂綿を入れずに耳元でガンガンの音で耳はつんぼになり、1 週間薬を飲んでやっと元の耳になり、涙を流して喜びました。

それから毎日岩盤に穴を掘り、できあがり、外には土のうで囲んでおき、またある時、穴爆ででっばっている岩に爆弾が直撃され、外 2 名、1 名戦死 1 名意識不明、すぐ本島に送る。うれしいことに元気でもどって来ました。今でもその戦友と文通しております。

昭和 19 年 5 月 2 日、米軍の機動部隊来島し、わが砲台に来て、発砲の様子を見ている。わが陣地からは発砲なし。そして夜になり死を覚悟した。朝になり、外を見ると船はなく、これで生きのびた。船の数、大小合わせ 80 位。

あるとき戦友と 2 人で見張り中、戦友は 7 ミリ 7 の機銃弾に左肩を打たれた。私は戦友を背負い 70 メートル陣地から息を切らして船まで向かった。途中戦友の血が私の体に流れ、はさみで軍服を切り、ぬがしてもらった。昭和 20 年 5 月、弾もなくなり一部兵器を持って本島へ陸戦隊に配置替えになりました。

島での病気はてんぐ熱とフランペシヤというおできで、大変苦しい思いでした。食べ物はタロ芋、さつまいも、たまに米、やしの実、オクラ、パパイヤ、蛙、かたつむり。

20 年 8 月 10 日頃より流行性の髄膜炎の疑いで隔離されました。戦友が食事を運んでくれる。8 月 16 日に戦争は終わったと知らせた。これで命がのびたとよるこんで捕虜生活に入る。たまに道路工事に出るらしい。20 年 12 月 15 日頃米軍の船で島発、12 月 25 日浦賀に上陸、久里浜海軍工作学校にて復員、ただちにふるさとへ帰る。